（別記様式4）
(Form 4)

学位論文の要旨（論文の内容の要旨）
Summary of the Dissertation (Summary of Dissertation Contents)

氏　　名　　杜　紅陽
Name　　DU HONGYANG

学　位　論　文
Dissertation
論　文　題　目
Dissertation Title

中国語を母語とする日本語学習者における条件表現の誤用に関する研究
－「と」「ば」「たら」「なら」を中心に－

本論文は、『YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver.12から抽出された「と」「ば」「たら」「なら」の誤用に焦点をあて、中国語を母語とする日本語学習者（以下、学習者と記す）がどのような誤用をなぜ産出させるのかを明らかにし、加えて、学習者が捉えている条件表現「と」「ば」「たら」「なら」とはどのようなものなのかを明らかにすることを目的としている。

本論文は、8章で構成されている。

第1章は序論である。本研究の目的、意義、研究資料、研究方法、本研究で用いる用語、構成などを述べている。

第2章は、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」に関する先行研究を論じている。条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の意味・用法、「と」「ば」「たら」「なら」と他の表現との類似関係、「と」「ば」「たら」「なら」の習得及び誤用、中国語の複文及び日中対照言語学研究などに関する先行研究を整理し、先行研究の問題点を指摘したうえで、残された課題を述べている。

第3章は、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」に観察される誤用の全体像を概観し、第4章以下で考察する対象を明らかにしている。研究対象を「条件的用法に関わるもの、なおかつ、学習者が条件表現『と』『ば』『たら』『なら』を誤って使用したもの」とする理由を述べるとともに、第4章から第6章では「と」「ば」「たら」を考察対象とし、第7章では「なら」を考察対象とすることについて誤用例を交えて説明している。

第4章から第6章は、第3章に従い、「なぜ学習者が『と』『ば』『たら』を使用するのか」を考察している。

第4章では、「と」「ば」「たら」の間の混用について分析と考察を行い、次の3点を明らかにしている。(1)「*ト→タラ」「*ト→バ」は、前件に「なる」「～ない」、後件に主観的な判断を表すモダリティなどが多く観察される。その要因は、①「□なると」「□ないと」などのスロット付き表現が形成されたこと、②日本語母語話者は「と」を「事態がいつも・自然に起こる」という捉え方で使用するが、学習者は「前件後件の強関連性」を表すものとして捉え、両者の間で「と」の捉え方に相違があること、③中国の日本語教科書に取り上げられている「春になると、花が咲きます」という定型例文の影響が窺えるといったことにある。(2)「*タラ→ト」「*タラ→バ」は、文章のジャンルに従い【論文】での誤用と【作文】での誤用に分けられ、前者には「～たら、～[可能・変化]る」、後者には「～[動作]たら、～[動作]た」という構文パターンが多く観察される。その要因は、いずれも時間的前後関係が明確であることから、学習者が「たら」を前件の「完了」を強く表すものとして捉えていることにある。(3)「*バ→ト」も文章のジャンルに従い【論文】での誤用と【作文】での誤用に分けられ、「～[判断・思考]ば、～[結論]」という構文パターンが多く観察される。その要因は、①「□見れば」「□思えば」などのスロット付き表現が形成されたこと、②「ば」が「判断・思考」と結び付けられたこと、③学習者が「一般的である」という「ば」の特徴を理解せず、「個別的で、一定の時間帯で成り立つ」を表すときに使用できるものとして捉えていることにある。

第5章では、「と」「ば」「たら」とテ形との混用について分析と考察を行い、「と」

「ば」「たら」の誤用要因が第4章の考察結果と一貫していることを、次の3点にまとめている。(1)「*ト→テ」は、「Aは～[知覚・思考]と、～[感情・思考]た」「Aは～[変化]と、～[変化]た」(「A」は主体(主語)を表す。以下同様)などの構文パターンが多く観察される。そこには、「外部から観察する」「前件後件をただ結びつける」という日本語母語話者の捉え方と異なり、「事態の内部に視点を置く」「前件後件の強関連性」を積極的に表現するという学習者の捉え方が認められる。(2)「*タラ→テ」は、「Aは～[外的行為]たら、～[外的行為]た」「Aは～[知覚]たら、～[感情・思考・外的行為]た」という構文パターンが多く観察される。3つ以上の動作の連続を表す誤用に基づいて考察した結果、「たら」は学習者によって前件の「完了」を明確に表現するものとして使用されている。(3)「*バ→テ」は、「Aは～[思考]ば、～[感情]る」という構文パターンが多く観察される。学習者は「ば」を「思考」と結び付け、「一般的である」という「ば」の特徴を理解していない。

第6章では、「と」「ば」「たら」と逆接条件表現「ても」、時間表現との混用及び条件表現の二重使用について分析と考察を行っている。第4章と第5章で論じた考察結果がこれらの誤用パターンにも当てはまることに加え、誤用要因がそのほかにもあることを論じ、次の3点にまとめている。(1)逆接条件表現「ても」との混用は、否定すべき条件・帰結の関係が否定されていない傾向が認められる。その要因は、日本語と中国語における順接・逆接の表現形式の不対応、前件に関心が寄せられた結果、前件後件の論理的関係にまで考えが及ばないことにある。(2)時間表現との混用は、大まかに「*ト→ルトキ」と「*タラ→テカラ、タトキ」にまとめることができるが、学習者における「と」「たら」の捉え方以外にも、そこには中国語における条件と時間に関する言語感覚が影響を及ぼしている。(3)条件表現の二重使用には、日本語母語話者はX1(1つ目の条件)がX2(2つ目の条件)とY(結果)を包摂するという包摂関係で表現するが、学習者はX1とX2を1つのまとまりとし、同一場面の設定と並列関係の表明に使用するといった違いが認められる。その要因は、日本語は多くの場合条件表現を二重に使用することを回避し、テ形などの表現を使用し2つの条件をつなげるが、中国語は条件表現を複数使用することができるという言語間の違いにある。

第7章は、「なぜ学習者が『なら』を使用するのか」を考察し、学習者が「なら」を使用するのは、次の2点が示すように、「なら」が事態やモノのとりたてを表すためであることを明らかにしている。(1)「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」という条件表現間での混用を見ると、構文パターンとして「～動詞ル形/～ないなら、～できる」と「～動詞ル形なら、～なる」が多く認められる。この状況から、事態を照らし合わせる、または、前文を受け継ぐという意味を読み取ることができ、学習者は「なら」を使用することで仮定だけではなく、前件事態を強く表現している。(2)「*ナラ→ハ」は、主題や対比を表す。学習者は、主題や対比を表すときの制約を身につけておらず、「仮定+主題/対比」で「なら」を使用し、前に来る名詞を強く表現している。

第8章は結論である。第4章から第7章での分析と考察に従い、学習者における条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の捉え方を、次の3点にまとめている。

(1)「と」「ば」「たら」「なら」の捉え方は前件と関連する。「と」「ば」「たら」は前件のアスペクトに基づき、「具体的な動作や変化であるかどうか」「完了したかどうか」によって使い分けがなされる。学習者にとって、具体的な動作や変化を表す役割を担うのは「と」と「たら」であり、その際、「完了」には「たら」が使われ、そうでないときは「と」が使われる。「と」「たら」とは対照的に、具体的な動作や変化を表さず、事態を全体的に描き出す役割を担うのが「ば」である。他方で、「なら」は「と」「ば」「たら」とは異なる様相を呈し、事態やモノのとりたてとして捉えられている。

(2)学習者における条件か否かの判断は、普遍的に成り立つ知識・常識のみならず、個人体験や文脈にも基づく。これは、「他人から見ても成り立つ」のように、普遍的に成り立つ知識・常識をもとに判断する日本語母語話者に比べると、より広範囲なものである。

(3)学習者における捉え方には、教科書の定型例文や中国語の影響が反映されている。教科書の定型例文の代表は「春になると、花が咲きます」であり、この例文は学習者における「と」の捉え方に大いに影響を与えている。

本論文は、「と」「ば」「たら」「なら」という条件表現間での混用にとどまらず、他の表現との混用も視野に入れ、多様な角度から分析と考察を行った。その結果、誤用には学習者独自の捉え方があり、学習者はそれに従い「と」「ば」「たら」「なら」を多様な場面で使用し、様々な誤用を生じさせていることがより鮮明となった。本論文で得られた知見は、今後の日本語教育の現場において、文法以外にも、学習者の表現意図

を配慮しながらの指導、使用場面と関連づけながらの説明を加える際に活用することができると考えられる。

今後の課題としては、①複文全体を視野に入れること、②非条件的用法に関わる誤用を対象とすること、③学習者の回避問題を議論すること、④話しことばにおける条件表現の誤用を検討すること、といった4つの課題が挙げられる。

備考　論文の要旨はＡ４判用紙を使用し，4,000字以内とする。ただし，英文の場合は1,500語以内とする。

Remark: The summary of the dissertation should be written on A4-size pages and should not exceed 4,000 Japanese characters. When written in English, it should not exceed 1,500 words.